

研究課題別中間評価結果

1. 研究課題名：局所性・指向性制御に基づく多人数調和型情報提示技術の構築と実践
2. 研究代表者： 苗村 健（東京大学大学院情報学環 教授）
3. 中間評価結果

(1) 研究課題の進捗状況と成果の見込みについて

総合評価コメント

質的にも量的にも期待通りの研究成果が出ている。人々の振舞いを阻害しないインタフェース技術の実現という当初目標が、視線を遮らない空間性の実現，作業中の思考を中断しない融和性の実現，安心して情報を共有できる開示性の実現という3つの柱に集約され，人々の行動を誘発するインタフェース技術の実現へと高められた点は高く評価できる。それらの概念は，でるキャラ，MRsoinCase, EchoSheet, CoPlet, Inter-Personal Browsing として実装・実証され，日本科学未来館での12万9千人を集めた展示としても実践された。このなかでは，可視光通信プロジェクタ，fVisiOn 光学系，紫外線プロジェクタなどのハードウェア開発など，実装上のハードルが高い課題も解決されている。実施期間短縮終了となった研究課題も少なからずあり，実用化への基盤も堅固になり，当初の期待を越えた研究進捗があったと認められる。学術発表に関しては，SIGGRAPH, UIST などインタラクション分野のトップカンファレンスで多くの発表を行っていることは高く評価できる。一方，学術誌論文としての成果が国内誌に限られているなど，まとまった知見の記述，継承など学術界への中長期的貢献という観点からは今一步の努力を期待したい。実証実験，アウトリーチ活動については幅広く行われており，今後のさらなる進展が期待される。

本研究の目的として掲げている「場集う人々の対面コミュニケーションを重視した「多人数調和型の情報提示技術」の確立」という観点からは，個々の技術を今後どのようにまとめ，柱として骨太にしていくか，という点について検討する余地があろう。また，新しい学問体系を構築するという意識を強め，この成果を人間理解に生かすというフィードバックでの努力も期待される。

以上